

鯖江市吉江の「七曲り」沿いの伝統的家屋と景観

吉田 純 一*

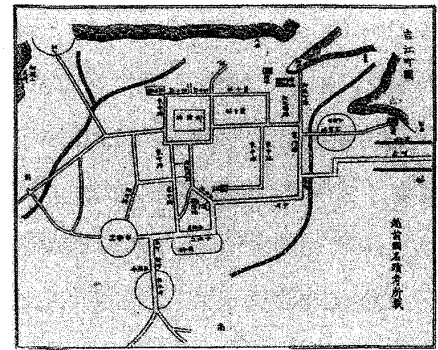
The Traditional Houses and the Scenery along the Nanamagari-street in Yoshie-cho, Sabae-City

YOSHIDA Junichi

Yoshie-cho in Sabae-city is the old castle town of Yoshie-clan which was organized in Shoho 2 year of the Edo-era by Masachika Matsudaira who was the fifth and the seventh lord of Fukui-clan after. The traditional houses are dotted along the `Nanamagari` street in Yoshie-cho. In this paper I point out these traditional houses and the good sceneries along the `Nanamagari` street.

1. はじめに

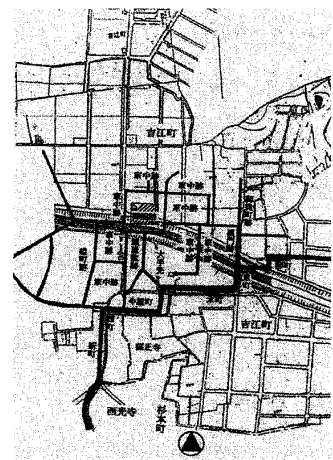
吉江藩は正保2年(1645)に松平昌親が起藩し、延宝2年(1674)に昌親が福井藩五代藩主として福井へ移るまで約30年間存続した⁽¹⁾。吉江藩へ至る道は、鳥羽付近で北陸街道から西に分岐し、城下東隣の米岡村から7回折れ曲がりながら吉江城下を抜けていた。そのために「七曲り」と呼ばれているが、現在も鯖江市米岡町～吉江町～杉本町の約1キロに渡ってよく旧状を留めている。そしてこの通り沿いには江戸時代から明治、大正、昭和戦前につくられた伝統的家屋が残存し、特徴的な景観が随所にみられる。本稿はこの「七曲り」沿いの伝統的家屋と通りの景観について紹介する。



「吉江町図」(『越前国名蹟考』掲載)

2. 「七曲がり」の変遷と現況

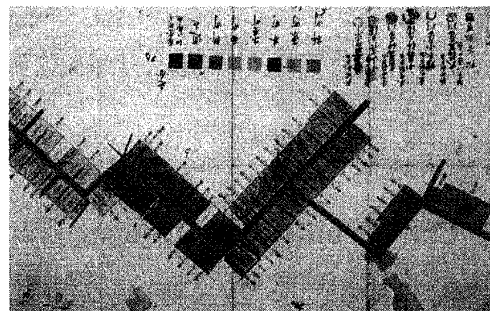
『越前国名蹟考』⁽²⁾掲載の絵図によると、「七曲り」は、吉江藩庁(御館)や家中屋敷の東側から南側を取り巻くように北東から南西に走っている。御館や家中屋敷跡は、廃藩後に取り払われ、さらに大正年間の浅水川の開鑿もあってまったく旧跡を留めていないが、「七曲り」は川を渡る旧東町の一画を除けば、ほぼ昔の絵図と一致している。城下町時代にはこの道に沿って町人たちの町屋敷が並び、折れ曲がり境にして東から順に柳町・東町・本町・牛屋町・西町



「吉江町図」と現況図

* 建設工学科 建築学専攻

・新町の6町に分かれていた。こうした町割の様子は、時代は下るが、明治期の地籍図からもうかがえる。折れ曲がりを繰り返す道は城下町特有のものであり、「七曲り」は吉江がかつて城下町であったことを示している。そして「七曲り」は吉江城下町の町割や構成にも大きな役割を果たしていた。



明治期の地籍図 (部分)

3. 「七曲り」沿いの町屋敷⁽³⁾

文化13年(1816)3月の『男女人数御改帳』⁽⁴⁾は、当時吉江城下にいた町人の人数調べで、戸主と思われる人名とその家族の人数が記されている。これによると、6町全体で99人の戸主名がみられる。1戸主=1所帯=1家数とみなせば、「七曲り」沿いや周辺に99戸の家があったことになる。町別には牛屋町が36戸で最も多く、本町16戸、東町と西町ともに14戸、柳町11戸、新町8戸であった。そして6町全体の人数は383人で、「医師」2人もこの中にみられる。

城下町時代の町人地の屋敷割の様子は不明であるが、明治期の地籍図⁽⁵⁾をみると、6町全体でやはり99筆の屋敷地があり、本町が最も多く27筆で、次いで東町が26筆、以下、牛屋町18筆、西町が14筆、柳町8筆、新町6筆である。これを文化13年の推定家数と比べると、西町が14で同じであるが、他の5町はすべて異なり、本町と東町はそれぞれ13筆、11筆多く、逆に牛屋町、柳町、新町はそれぞれ18筆、3筆、2筆少なくなっている。違いが大きい本町、東町、牛屋町のうち東町は北半が城下町時代には北半部は家中屋敷があったところで、廃藩後、明治までの間に町人地化が進んだことも考えられる⁽⁶⁾。しかし、本町の増加と牛屋町の減少の理由は定かでない。

4. 「七曲り」沿いの伝統的家屋 (表1参照)

大正年間に旧吉江城下の中ほどを東西に貫通するように浅水川が開鑿され、さらに最近の河川拡幅整備工事によって、もとの「七曲り」筋のうち、旧東町の一画が浅水川とそれに架かる橋に変わっている。これ以外の筋はほぼ旧態のまま残っているが、道沿いには空き地や新しい家も多い。しかし、江戸時代に遡る家屋あるいは明治から大正、昭和期につくられ、伝統的な建築形式を留める家屋も散見され、「七曲り」を歩けば、随所に良好な、目を見張る景観を味わうことができる。

①農家型と町家型

現在の「七曲り」筋にみられる伝統的な家屋は、表構えやその建築形式から農家型と町家型の2種に大別できる。

瓦葺の切妻造、妻入りの家屋(屋根棟を通りに直角に通る、縦屋ともいう)で、正面に向ける三角形の妻面を束と貫で格子状に組み、その間を白(あるいは黒)漆喰壁で仕上げた、美しい妻面をもつ家を農家型とし、同じ瓦葺、切妻造であるが、平入りすなわち屋根棟を通りに平行に通

す家（横屋ともいう）を町家型と呼ぶことにする。

農家型は江戸時代の茅葺農家の系譜を引き、明治以降、県内全域に広く普及した家屋形式で、前方の下屋を左右に延ばし、通りより奥まってほぼ屋敷の中央にたつのが一般的である。後者の町家型は江戸時代の城下町などの町場にあった家の系譜を引くもので、通りに面してたち、前面に下屋庇や格子、さらに軒の両端に袖壁などをもつことが多い。

②農家型の例

「七曲り」沿いにおける農家型の家屋は、①大橋光家住宅、②高嶋正勝家住宅、③高嶋善光家住宅、⑦中尾秀一郎家住宅、⑪高嶋信義家住宅、⑫高嶋正一家住宅、⑮若栗輝一郎家住宅、⑯武部伝衛家住宅、⑱竹内静馬家住宅などがあり、④加藤平吉家住宅もこれに含めてよい。

これらの中で旧牛屋町のほぼ中央で向い合う高橋信義家住宅と高橋正一家住宅は広大な屋敷にたたずむ大規模かつ上質な農家型の例である。武部伝衛家住宅は通りからやや奥まったつものの、当地の旧家で、やはり豪壮な家屋、屋敷構を持つ例である。また、高嶋正勝家住宅と加藤平吉家住宅、若栗輝一家住宅は農家型ながら通りに面してたち、前2者には前面に格子がみられるなど町家型の要素も持ち合わせている。



農家型の例 (⑩高嶋信義家住宅)

③町家型の例

「七曲り」沿いにみられる町家型の例は、⑥大谷利明家住宅、⑨高島豊家住宅、⑬小川正喜家住宅、⑭小島七蔵家住宅などで、通りよりやや南に奥まってみられる⑧畑中敬一家住宅や⑩藤井昇一郎家住宅もこの型に含まれる。仕出し業を営む⑤関口亨家住宅もこの類例とみてよいだろう。これらの中でも特に高島豊家住宅は江戸時代末から明治初期ころの建築とみられ、上げ下げの板戸（シトミ）や厚板葺の下屋庇、その下方につく板葺きの小庇、軒を支える登梁など伝統的な町家の表構えを色濃く留めていて、特に注目される。



町家型の例 (⑨高島豊家住宅)

④その他

上記の農家型、町家型のいずれにも属さない特異な事例として⑰松村憲正家住宅がある。切妻造、妻入りの大規模な家屋で、赤瓦葺きの屋根は反りをもち、棟には煙出しもみられる。「七曲り」筋では特異な形態であるが、ご当主によると、この家は福井の寺院の庫裏を移築したという。建築年代も「七曲り」筋では最も古く、おそらく江戸中期から後期と推察される。今後、詳細な調査が望まれる家屋である。



その他の例 (⑰松村憲正家住宅)

表1 「七曲り」沿いの伝統的家屋

	家屋名	所在地	建築形態	建築年代	主屋規模	特徴
①	大橋 光家住宅	米岡町5-8	農家型	昭和15年ごろ	間口4間、奥行6間半	新道の門番を務めたという。2、3年前に瓦葺替、東側に2棟の土蔵
②	高島 正勝家住宅	吉江町3-21	農家型	昭和10年ごろ	間口4間	農家型であるが、通りに面し、格子もみられる。旧本町の東端に位置、主屋とともに離れや土蔵も通り沿いにあり、吉江町の東入り口の景観ポイントとしても重要
③	高島 善光家住宅	吉江町3-20	農家型	昭和初	間口3間半	高島正勝家の対面、通りよりやや奥まっつてあり。同じ頃の建築か
④	加藤 平吉家住宅	吉江町3-43	農家型		間口3間半、奥行4間半	出格子をもつ。二階壁面はトタン張り
⑤	関口 亨家住宅	吉江町3-4	町家型	昭和10年ごろ	間口8間、	屋根は入母屋造。仕出し屋のため二階が高い。背後に客座敷棟が続き、昭和期の料亭の名残あり
⑥	大谷 利明家住宅	吉江町3-2	町家型	築60年余	間口4間、奥行4間	一、二階ともに階高大きく、新しい町家型
⑦	中尾 秀一郎家住宅	吉江町3-2	農家型		間口3間半、奥行4間半	
⑧	畑中 敬一家住宅	吉江町21-34	町家型	築55年(震災後)	間口5間半、奥行6間	町家型を基本とするが、農家型の手法も混在。戦後の大規模家屋の一例
⑨	高島 豊家住宅	吉江町2-9	町家型	江戸末～明治初	間口6間、奥行6間	上げ下げの板戸(シトミ)、厚板葺下屋、板庇、登梁など伝統的な表構えを色濃く残す。ミセの間や15畳の主ザシキなど内部の残りも良い。旧牛屋町の角地にたつ。
⑩	藤井 昇一郎家住宅	吉江町2-11	町家型	戦後	間口4間、奥行6間	「七曲り」通りより南に奥まっつてある。一、二階の階高大きく、新しい形式であるが、煙出しをもち、「七曲り」筋からは裏面のみ見える
⑪	高島 信義家住宅	吉江町2-3	農家型	明治	間口5間	旧牛屋町の中ほどにある広い屋敷を構える。通り沿いに長屋門や瓦塀があり、通りの景観に大きく寄与。主屋は大規模で豪壮である。140年ほど前の建築というが、現状は明治中期頃の様相を呈す。土蔵も2棟あり。長屋門は福井の武家屋敷にあったものを移築したという。
⑫	高島 正一家住宅	吉江町2-4	農家型	大正初	間口8間	信義家の対面。やはり広大な屋敷で、通り沿いに門や塀を構える。昔藍染業を営む。主屋は大規模で、上質。師田組(武生市)がつくる。西側に数奇屋風の離れ茶室もあり。土蔵2棟
⑬	小川 正喜家住宅	吉江町1-24	町家型	昭和初	間口4間	二階表側に手摺あり、両側に袖壁、標準的な町家型の例
⑭	小島 七蔵家住宅	吉江町1-241	町家型	大正～昭和	間口5間、奥行4間	角地にあり、建物の隅部を切り落としている。一階に繊細な格子、二階に手摺あり、以前は旅館あるいは料亭?
⑮	若栗 輝一家住宅	杉本町1-11	農家型	昭和11年	間口4間、奥行6間	当初から店を意識し、奥のザシキなども上質。昭和初期の農家型の代表例
⑯	武部 伝衛家住宅	杉本町1-49	農家型	明治初	間口7間、奥行5間	通りから奥まっつてあり、大きな棟門を構える。農家型だが、平入り。二階は低い。古く組頭を務めた旧家で、整った庭園あり、多数の古文書も所蔵。土蔵1棟
⑰	松村 憲正家住宅	杉本町1-41	特殊型	江戸中期～後期	間口6間、奥行7間	切妻造 平入り、赤瓦葺の反り屋根、明和8年に焼失した際、福井の寺の匾額を移築したと伝わる。鬼瓦に寺名の刻名ありという。言い伝えに相応しく、建築形式は民家とは異なり、建築年代も江戸まで遡ることは間違いない。土蔵もあつたが、S56豪雪で倒壊
⑱	竹内 静馬家住宅	杉本町1-38	農家型	昭和初	間口4間、奥行5間半	「七曲り」の南西端に位置。格子組・白壁の裏面や懸魚、煙出しなどならなる正面の構えは「七曲り」の南入り口の景観ポイント

5. 「七曲り」沿いの景観（p 23 掲載の図参照）

次に上記の伝統的家屋に注目しながら「七曲り」筋の特徴的な景観を地区ごとにみる。

①農家型家屋の集中地区（旧柳町）

米岡地区は、吉江城下の北東に位置していた旧柳町にあたる。東から数えて最初の曲がりがある地区で、その角地にあるのが①大橋光家で、当家长宅は典型的な農家型の例である。向かって右手の前後に2棟の土蔵もあり、屋敷構えもよく整っている。また、「七曲り」筋からはやや西や北に外れるが、当家の周りには同じような美しい妻面をもつ農家型の家屋が集中して存在している。



②旧本町東入り口

浅水川にかかる橋を南に渡りきった角地は旧本町の東入り口にあたり、旧柳町の方から数えて4番目の曲がりになる。この北角にたつのが②高島正勝家住宅で、南対面には③高橋善光家住宅もある。特に②高島正勝家住宅は農家型の主屋を通り沿いに構え、昭和期の建設と見られる接客用の付属建物や土蔵も通り沿いにつながる。そしてここから西方をみると、農家型の家屋が両側に数棟点在している。



③旧牛屋町地区

旧本町から旧牛屋町にかけては、「七曲り」のもっとも良好な景観形成地区である。5番目の折れ曲がりをもつ南に曲ると、左手に町家型の⑥大谷家住宅と農家型の⑦中尾秀一郎家住宅が並んでいる。6番目の曲がりをもつ西に折れた旧牛屋町の通り沿いは「七曲り」筋でも最良の景観地区である。東北隅に町家型の典型である⑨高島豊家住宅があり、北側には⑩高島義信家の塀と長屋門、南側には⑫高島正一家の塀や門が連続して続き、西端に町家型の⑬小川正喜家住宅と⑭小島七蔵家住宅もある。



町家型と農家型が並んでいる景観



⑩高島義信家の長屋門



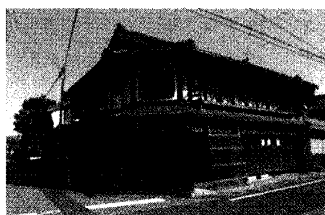
旧牛屋町通りの景観



⑫高島正一家の門

④旧西町・旧新町地区

7番目の曲がり角地にたつ⑭小島七蔵家住宅は、敷地だけでなく建物そのものも隅部を切り落とされている。ここを南に折れると、旧西町・旧新町に入るが、この通りは現在も主要道であり、両側に郵便局や酒屋、各種の店舗もみられる。住宅も新しいものも多く、歴史的な景観はほとんどないが、角を曲がってすぐのところにある小島七蔵家の土蔵、小島泉家と加藤吉平家の起り屋根をもつ瀟洒な門や板塀などからわずかながらも歴史的景観をうかがうことができる。



小島泉家の門と塀



加藤吉平家の門と塀

⑤旧新町南入り口

農家型の美しい妻面をもつ⑯竹内静馬家住宅は、「七曲り」の南端にある。通り沿いに板塀も続いていて、南側から「七曲り」にアプローチする際のビューポイントになっている。当家の北に続く⑰松村憲正家住宅はやや奥まっちはいるものの、反りをもった赤瓦葺の特徴的な大屋根が印象的で、松村家住宅も南入り口の景観に大きな役割を果たしている。



⑥角地の処理

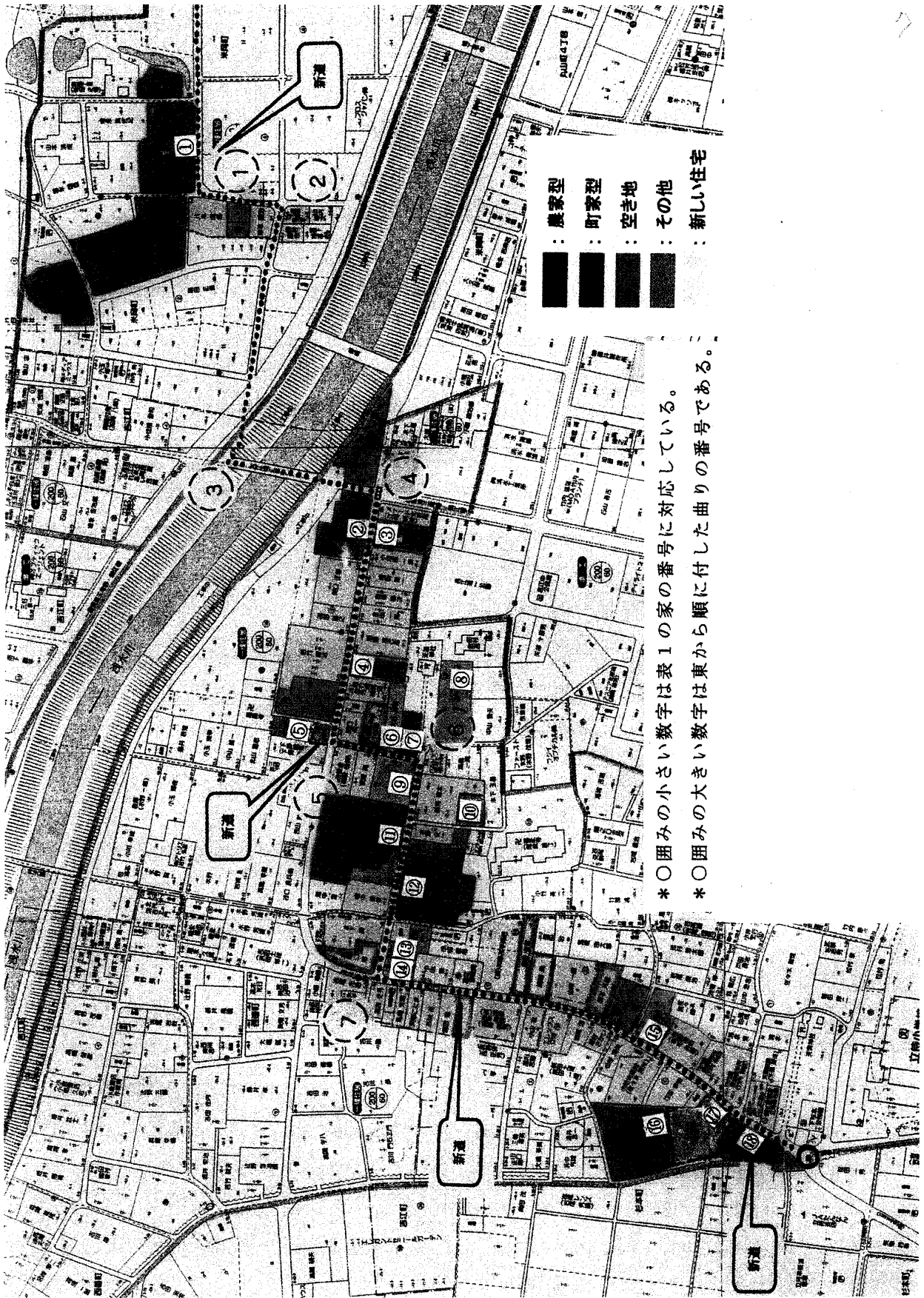
こうした家屋が織り成す景観とともに見逃せないのが折れ曲がりの隅部の処理である。東から4番目、5番目、6番目、7番目の各折れ曲がりでは、内回りの側の敷地隅部を斜めに切り落としている。特に7番目すなわち旧牛屋町の西端部の角地にたつ⑭小島七蔵家の場合は、住宅の隅を切り落としている。城下町時代からこうした隅部の処理がなされていたかどうかは定かでないが、少なくとも現在の「七曲り」の特徴として指摘できる。



旧牛屋町の角地（分布図6の曲り）

⑦その他

旧本町の東側に鎮座する吉江神社は吉江藩を興した松平昌親を祀る神社で、昌親の100回忌に当たる文化8年(1811)に造営された⁽⁷⁾。浅水川の改修に伴い、2度の移転を余儀なくされたが、吉江にとって町の創設者を祀る社としてこの社も貴重な歴史的遺産といえる。



また、「七曲り」からはさらに南に外れるが、杉本町にある西光寺の表門は、吉江藩の御館の門を移築したと伝わる。確証はないものの、建築様式からみてその可能性は高く⁽⁸⁾、これも吉江に関わる歴史的遺産のひとつである。

6. おわりに

「七曲り」は吉江藩の城下町を通り抜ける主要な道で、吉江城下の町割構成にも大きな意味をもち、この道沿いに町屋敷が軒を連ね、相当な賑わいをみせていた。城下町時代の通りの形態は、旧東町の一画を除いて現在もほぼ旧状を留めているが、通り沿いの家屋や景観に関しては城下町時代の面影はほとんど残っていない。

しかし、幕末あるいは明治から大正、昭和初期につくられた農家型と町家型の伝統的家屋が現在も通り沿いに点在しており、随所に「七曲り」特有の優れた景観をうかがうことができる。

建築的には農家型の②高島正勝家住宅や⑪高島信義家住宅、⑫高島正一家住宅、町家型の⑨高島豊家住宅、⑭小島七郎家住宅、そして寺院の庫裏を移したと伝わる⑰松村憲正家住宅などが特に注目される。そして景観的には⑨高島豊家・⑪高島信義家・⑫高島正一家・⑬小川正喜家・⑭小島七蔵家が並ぶ旧牛屋町地区は特に良好であり、この他、農家型と町家型の2種の家屋形式が混在する景観や折れ曲がりの角地の処理方法なども特筆される。

このように鯖江市吉江町の「七曲り」は城下町特有の道の形態を残しながら伝統的家屋が随所残り、赴きある景観を創り出している。こうした「七曲り」の歴史的、文化的特徴を今後の吉江地域のまちづくりに有効に活かして欲しいものである。

- (1) 松原信之「吉江藩領の確定について」『若越郷土研究』46-4 など
- (2) 『越前国名蹟考』文化 12 年(1815)に福井藩右筆井上翼章が書き残した記録、本稿は杉原丈夫編『新訂越前国名蹟考』昭和 55 年より転載した。
- (3) 城下町時代の町屋敷については、伊豆蔵庫喜・吉田純一「吉江藩とその城下町」(『福井工業大学研究紀要 第 24 号』) 1994
- (4) 『文化十三丙子三月日 男女人数御改帳 吉江町 下帳扣』小山喜平家所蔵
- (5) 『越前国丹生郡第十八区吉江町』小山喜平家所蔵
この絵図には通り沿いの各屋敷地の所有者名と坪数、地番が記され、屋敷地は町別に色分けされている。
- (6) 註 5 の明治地籍図において、東町の北側は屋敷割されているが、註 2 掲載の吉江町図ではここは道幅が狭く、「家中」とあることから判断できる。
- (7) 福井県『福井の歴史的建造物』平成 17 年 参照
- (8) 伊豆蔵庫喜・吉田純一「吉江藩と西光寺正門について」日本建築学会大会学術講演梗概集 平成 5 年

(平成19年3月29日受理)